須磨に行く頭中将

――源氏物語藤原氏論序説――

中澤美乃

一　頭中将の変貌をめぐって

須磨に春が来た。しかしうららかな春となっても、源氏の心は孤独を深めるばかりである。須磨に流れてから時ばかりが経つ。京から来ていた手紙も弘徽殿大后をはじめとした右大臣勢力に握りつぶされ、今は音沙汰一つない。寂寥を極める源氏にとって、華やかな春の様子はむしろ不愉快なものであった。そんな時たった一人、源氏の友人がやって来た。その人こそ、源氏と長きにわたって関わってきた頭中将である。

大殿の三位中将は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世のおぼえ重くてものしたまへど、世の中あはれにあぢきなく、もののをりごとに恋しくおぼえたまへば、事の聞こえありて罪に当たるとも、いかがはせむと思しなして、にはかに参でたまふ。

（「須磨」②二一三頁）[1]

頭中将は世間の評判も良く、既に「宰相中将」に昇っている。源氏と敵対する右大臣政権下の朱雀帝の御代において、源氏を慕うことは危険なことであった。それにも関わらず、彼はやって来た。そしてそれが、弘徽殿大后達に露見して罰せられても構わないと思っているのであった。源氏は自分を思う頭中将の心に感動し、友と涙ながらの再会をする。

『無名草子』では、この須磨訪問を源氏と頭中将の友情の美談であるとし、反源氏体制が敷かれた世の中をものともせず、須磨に向かったことを「須磨へ訪ねおはしたるほどなど、返す返すめでたし」[2]として頭中将を評価している。このように頭中将の須磨訪問は、源氏と頭中将の政情に左右されない強い友情を示すものとして語られてきた。

源氏と頭中将の友情は、源氏帰京後も続くものと思われた。だが、頭中将は源氏帰京後の「絵合」巻において源氏に立ちふさがる存在として物語に登場することとなる。この頭中将の在り方の変化を、松尾聡氏[3]は「性格矛盾の露呈」として物語成立の過程での齟齬であるとした。矛盾と読める程、著しく在り方は変化している。このことから武原弘氏[4]や北川原平造氏[5]、田坂憲二氏[6]によって、頭中将の「人物像の変貌」が唱えられてきており研究史の中でも概ねこれが認められている。

しかしながら、頭中将の出身の氏族が「藤原氏」であることを踏まえると、左大臣家を離れた源氏との対立はごく当然のことのように思えてならない。むしろ、須磨に訪問することこそ不自然な話である。また、他の多くの人々が朱雀帝への叛意を認められることを恐れて源氏との交友を絶った（「須磨」②二〇六頁）状況のもと、頭中将が須磨に訪問したことは、内裏の政治状況や頭中将の在り方を照らし出すものと言えよう。

本稿では、頭中将が宰相中将となったことを始発に頭中将の訪問の理由を考えつつ、頭中将が「絵合」巻から対立者として現れてくる必然性を頭中将が「藤原氏」であるという[7]観点から考察する。その上で頭中将が、何を目指したのかを明らかにしたい。

二　須磨に行く「宰相中将」

そもそも「宰相中将」とは、宰相を兼任する中将の呼称[8]である。笹山晴生氏は、この「宰相中将」について十世紀の摂関政治形成期において「各権門の栄誉職としての性格を強め、その地位が特権的なもの」の典型例であるとしつつも、九世紀において「宰相中将」に任命されることは「天皇の特別の計らいによって与えられる」有力貴族の特権であったと述べる[9]。

桐壺帝が崩御し右大臣家が勢力をのばしていくなか頭中将は、右大臣家に冷遇され、右大臣には婿の数にすら入れられていない[10]。また、自身の所属する左大臣家は、右大臣家の専横によって不遇の日々を過ごしている（賢木②一三九頁）。このことから「各権門の栄誉職」として、頭中将が「宰相中将」となったとは考え難い。では、何故頭中将は「宰相中将」に任命されるのであろうか。『源氏物語』では、当時の社会の在り方が反映されている。史上の実例と頭中将の例を比較すると、頭中将が「宰相中将」に任命された理由を考えることができよう。そのために、歴史上の宰相中将の特徴について考えていきたい。

醍醐朝から一条朝[11]までの間に宰相中将は二十九名[12]存在し、人物を比較検討すると宰相中将に就任した人物の特徴として、宰相中

将となる年齢、その後の昇進、女兄弟の入内という三点が挙げられる。それぞれの特徴を詳しく見ていこう。

一点目の特徴である年齢は、参議であるにも関わらず非常に若いという点だ。就任の年齢が最も若いのは、藤原隆家（一条朝）の十七歳で最も老齢なのが源正明の五十八歳（村上朝）である。年齢に幅があるように思えるが、平均の年齢は、年齢が不明な者を除くと三十五～三十六歳である。国政に深く関わる参議であるのにも関わらず、二十代で就任している者も多い。[13]

二点目に挙げられる特徴として、その後昇進の順が挙げられる。宰相中将になった後、権中納言あるいは中納言に昇進しその後大臣となる場合が十例[14]ある。この例外に当たるのは、若くして病没した者[15]、急激に失脚した者[16]、宰相中将になった年齢が高齢の者[17]などである。また、醍醐朝から一条朝において右大臣は二十一名、左大臣十一名、太政大臣七名がいたが、うちそれぞれ九名[18]、三名[19]、三名[20]は宰相中将を経て大臣となった人物である。特に、太政大臣に関しては半数が宰相中将出身者なのである。つまり、若くして宰相中将となることは、その後大臣となるための過程とも言えよう。

三点目の特徴としては、宰相中将の女兄弟が女御として入内している点が挙げられる。それぞれの家が女御を輩出できる格を持っていることは確かである。しかし、宰相中将の二十九例中二十二例[21]で、妹もしくは姉が女御として入内している。また、女御が皇子を生みその子が帝となったり（五例）[22]、女御自身が中宮、皇后、皇太后に立后されていたりする例（九例）[23]も見られる。

前述までの特徴であった、若くして任命されその後大臣まで昇進を遂げる宰相中将の多くは、姉妹が入内しているという三点目の特徴を兼ねていた。

これらの例を踏まえると、宰相中将となる人物の多くは権勢を極め、加えて宰相中将の女兄弟は帝に入内していることになる。つまり宰相中将である男子とその女兄弟が女御として揃って出仕することは、権勢を極めるための所謂典型的な出仕の形であると考えることができるのだ。このように女兄弟とそろって帝に仕えていくことは宰相中将にとって、自身が大臣の位まで上りつめることを可能にする。これと同時に、女兄弟が帝との間に子供を生んだ場合、外戚としての立場すら獲得していくのだ。宰相中将と女御が揃って出仕することは、将来政治の中枢に関わっていくであろう家の子息が、結果として未来の外戚政治の基盤を得るために必要な出仕の形の一つであると言えるのである。

史上の宰相中将の特徴を、『源氏物語』の「宰相中将」達も持っている。物語の宰相中将には源氏、頭中将、夕霧、薫、蔵人少将

の五名[24]が挙げられ、一点目の特徴の若年での就任は全員が果している。[25]二点目のその後の昇進に関しては、薫や夕霧の子息などその後の昇進が語られない人物を除く、源氏（准太政天皇）、頭中将（太政大臣）、夕霧（右大臣）の全員が大臣以上の位に就いており、史実と同じ特徴を持っていることが言える。三点目については、夕霧、薫、夕霧の子息があてはまりこれらの人物の女兄弟は、帝または東宮に入内している。[26]この点から言えば『源氏物語』でも、宰相中将とその女兄弟である女御が同じ帝に仕えていくことは、将来の外戚政治の基盤になり、権勢獲得の布石となったのである。

しかし、本稿の始発において宰相中将となっている頭中将と源氏はこの三点目の特徴を兼ねていない。ただし笹山氏の宰相中将の在り方の指摘について踏まえると、入内した女兄弟が不在でも源氏が宰相中将に就任することは、必ずしも不自然ではない。父桐壺帝の御代に宰相中将となった源氏は、桐壺帝の「天皇の特別の計らい」によって宰相中将となったと考えられるからである。実際に史実でも、源兼明のように一世源氏が宰相中将となった例もある。

そのように考えると問題となってくるのは、頭中将の宰相中将就任である。頭中将のたった一人の妹、葵の上は「須磨」巻時点で既に没している。そうなると頭中将もまた源氏のように「天皇の特別の計らい」によって、宰相中将に就任したと考えるのが自然である。頭中将は朱雀帝御代において宰相中将に就任した。この就任は朱雀帝の「特別の計らい」によるものだと言える。つまり、頭中将が「須磨」巻前後で宰相中将に就任するのは朱雀帝の計らいであり、意思であると考えられるのだ。

物語はこの時期、桐壺帝と源氏のように強く結び付いているはずの頭中将と朱雀帝の仲を語らない。しかし、「若菜上」巻において頭中将と朱雀帝の強い結び付きが語られる。

御腰結には、太政大臣を、かねてより聞こえさせたまへりければ、ことごとしくおはする人にて、参りにくく思しけれど、院の御言を昔より背き申したまはねば、参りたまふ。

（「若菜上」④四二頁）

「若菜上」巻において、頭中将が女三の宮の腰結役となることが語られる。それとともに、頭中将が朱雀帝の「御言に背き申したまはねば」と朱雀帝の言葉に従う存在であったことが明かされる。

須磨訪問がなされた朱雀帝の御代にこそ、頭中将と朱雀帝の結び付きは語られないが、朱雀帝は桐壺帝との約束を破り、源氏を追いやったことを後悔している（「須磨」②一九七・一九八頁）。これに伴って朱雀帝は源氏のことが気がかりでたまらなくなり、源氏を許さず政治を我が物にする外戚の右大臣家に不満を抱いて

いる。[21]

一方で頭中将は、右大臣家とは疎遠でむしろ右大臣家に敵対する存在であった。そのような状況で、朱雀帝の反右大臣家という意思を汲むための存在として、同じく反右大臣家である頭中将が宰相中将となったのではないだろうか。宰相中将が帝の特別な意向に沿うものであれば、朱雀帝は右大臣の子息を宰相中将にすることができたはずであるにも関わらず、右大臣家からの起用をせずに頭中将を宰相中将にした。そこには、朱雀帝の右大臣家に対する反発の意思を見ることができよう。朱雀帝は京に残したかった源氏の代わりとして、頭中将を宰相中将に据え、自身の意向を示したのであり頭中将もそれに従ったのである。そして朱雀帝は気に掛かって堪らないという心情から、頭中将に源氏を訪問させたのではないだろうか。頭中将はその「御言に背き申したまは」ずに源氏を訪問するのである。

そのように考えれば、頭中将の須磨訪問が単なる友情によるものではないと思われてくる。そこには「藤原氏」としての頭中将の姿が表れていると思われるが、さらに考察を深めてみたい。

三　「いまめかし」き頭中将

頭中将が変貌したと語られる大きな要因が、頭中将が源氏に政治的に対立することが挙げられるが、もし頭中将の須磨訪問がたんに友情によるものでないとすれば、その見方は変わってくるだろう。

二人は、冷泉帝にそれぞれの家から入内した斎宮女御と弘徽殿女御の中宮立后をめぐって大きく対立することとなるが、その対峙は、「絵合」巻の絵合という文化的行事に託され語られることとなる。そして、源氏と頭中将が対立する場面で、頭中将の性質は以下のように語られている。

権中納言聞きたまひて、あくまでかどかどしくいまめきたまへる御心にて、我人に劣りなむやと思しはげみて、すぐれたる上手どもを召し取りて、いみじくいましめて、またなきさまなる絵どもを、二なき紙どもに描き集めさせたまふ。

（「絵合」②三七六頁）

頭中将は、斎宮女御に冷泉帝の寵愛が傾いた原因が絵にあることを聞き帝の心を取り返すため、優れた絵の名人を呼び寄せ、彼らにまたとなく立派な紙に絵を描かせている。競争心に突き動かされる頭中将の性質を本文は、「あくまでかどかどしくいまめきたまへる御心」と語り、どこまでも競争心が強く派手である頭中将の性質を示す。つまり頭中将はその「いまめかし」い性質によって源氏の躍進を妨害するのであるが、頭中将の「いまめかし」は

この場面が初出である。では何故この巻で頭中将は、「いまめかし」い性質を持った存在として描かれるのであろうか。「いまめかし」という性質をめぐって、森野正弘氏は、「桐壺」巻から「絵合」巻の「いまめかし」のいくつかが源氏に敵対していた右大臣家に付与されていたことに着目し、「いまめかし」が物語において源氏の政治的な「敵対者」の特徴を示していると述べる。[28] また、助川幸逸郎氏は「絵合」巻で源氏が「いにしへの名高くゆゑある」という「古めかし」い特徴を持っていることから「いまめかし」と「古めかし」が個人の性質を超えそれぞれの家を代表する「美意識」となっていると述べる。[29] だが、頭中将に与えられた「いまめかし」によって示されるのは果たしてそれだけであろうか。

『源氏物語』のなかで、「いまめく」、「いまめかし」という用例は全部で一〇四例ある。そのうち男女による使い分けを見ると、まず、女性への用例は軒端の荻、北山の尼君、紫の上、源典侍、六条御息所、藤壺中宮、朝顔の斎院、藤典侍、玉鬘、近江の君、真木柱、一条御息所、六の君、宮の御方、大納言の本妻腹の姫君達、大君（玉鬘の娘）、内裏の君、女二の宮、中の君、横川の尼たち、浮舟にみられた。その中でも特に、玉鬘、紫の上、真木柱、中の君、藤壺中宮、六条御息所には複数回「いまめかし」とされている。一方男性は、伊予介、源氏、右大臣、頭中将、柏木、夕霧、匂宮、式部卿の宮、今上帝に付与されており、その中で性質を「いまめかし」とされているのは、伊予介、源氏、右大臣家、式部卿の宮、頭中将、夕霧、匂宮である。ただし、用例と本文の意味を考えるとその性質は、好色さや浮気っぽさを示す「いまめかし」と、派手、現代風であるなど「いまめかし」の二つに分類することができる。

① 尼君「あな、いまめかし。この君や世づいたるほどにおはするとぞ思すらん。さるにては、かの若草を、いかで聞いたまへることぞ」　（「若紫」①二一六頁）

② そらだきものいとけぶたうくゆりて、衣の音なひいとはなやかにふるまいなして、心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ、いまめかしきことを好みたるわたりにて、やむごとなき御方々物見たまふとて、この戸口は占めたまへるなるべし。　（「花宴」①三六五頁）

右の①は幼い紫の上を引き取りたいと願う、源氏に対する北山の尼君の源氏評である。好色さや浮気っぽさを示す言葉として、「いまめかし」が付与されている。このような例は源氏に限らず、空蟬に対する伊予介の気持ち（「帚木」①九七頁）や、落葉の宮に夢中になる夕霧（「横笛」④三六〇頁・「夕霧」④四二九頁）、匂宮の浮気心（「宿木」⑤四〇五・四一二・四二二頁）などが挙げられる。

一方、②の例は右大臣家の家風を示す言葉である。右大臣家の派手さや華やかさを好む在り方がこの「いまめかし」に表れている。ここで考えたい「絵合」巻の頭中将の「いまめかし」い性質は、好色さや浮気っぽさを表しているのではない。頭中将の派手好みで当世風な性質を示してるため、ここでは特に、②の現代風であることや派手好みであることを示す「いまめかし」について考えるものとする。②に当てはまる用例を挙げると以下のようになる。

③ そらだきものいとけぶたうくゆりて、衣の音なひいとはなやかにふるまいなして、心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ、いまめかしきことを好みたるわたりにて、やむごとなき御方々物見たまふとて、この戸口は占めたまへるなるべし。

（「花宴」①三六五頁）

④ 兵部卿宮も常に渡りたまひつつ、御遊びなどもをかしうおはする宮なれば、いまめかしき御あはひどもなり。

（「賢木」②一四三頁）

⑤ 権中納言聞きたまひて、あくまでかどかどしくいまめきたまへる御心にて、我人に劣りなむやと思しはげみて、すぐれたる上手どもを、二なき紙どもに描き集めさせたまふ。

（「絵合」②三七六頁）

⑥ おほかたも、いまめかしくおはする宮にて、この院、大殿にさしつぎたてまつりては、人も参り仕うまつり、世人も重く思ひきこえけり。

（「若菜下」④一六〇頁）

⑦ 宮は、いと心苦しく思しながら、いまめかしき御心はいかでめでたきさまに待ち思はれんと心げさうして、えならずたきしめたまへる御けはひ言はん方なし。（「宿木」⑤四〇五頁）

⑧ 宮のいまめかしく好みたちたまへるほどにて、思しおこしたりけるも、げに心苦しく推しはからるれば、いとあはれにて

（「宿木」⑤四二二頁）

⑨ いかめしうなりにたる御族なれば、なかなかいにしえよりいまめかしきことはまさりてさえなむありけむ。

（「蜻蛉」⑥二六四頁）

これらのうち③は、右大臣家の派手さを好む家風、④は、「賢木」巻の式部卿の宮が冷泉帝の華やかでしゃれた遊び相手であること、⑤は本節の始発場面である頭中将の性質、⑥は「若菜下」巻の式部卿の宮の時流に敏感で、派手好みな在り方、⑦と⑧は、匂宮の派手さや華やかさを好む性質、⑨は、夕霧一族の華やかな様子が源氏存命中よりも勝っていることについてそれぞれ述べたものである。こうした当世風、派手などの意味を持った男性の「いまめかし」い性質に関して、池田節子氏は以下のように述べる。[30]

右大臣家の場合、桐壺巻では、桐壺帝の妹を妻とし、光源氏

を婿とする左大臣に「ものにあらずおされたまへり」であったが、花宴巻では、即位間近の春宮を擁して、勢いづいているのである。一方、絵合巻には……中略……光源氏は政界復帰後権力を蓄えつつあったであろうが、「旧右大臣家を吸収し、その支援を受けている」権中納言が描かれていることによって示されていると言えよう。

このように池田氏は、「いまめかし」い性質とされる右大臣家が「花宴」巻では「即位間近の春宮を擁して、勢いづいている」こと、頭中将家が「絵合」巻では「旧右大臣家を吸収し、支援を受けている」ことを挙げつつ、「いまめかし」い性質を持った人々が「権勢家」としての役割を担っていると述べる。

派手や当世風などの意味の「いまめかし」い性質が権勢と関わっているという点に注目すると、先ほど挙げた⑥の「若菜下」巻の式部卿の宮の例についても「いまめかし」と性質が評される理由が明らかになってくる。式部卿の宮は、先帝の御子、藤壺中宮の兄として長きに渡って権勢を握っていた。本文にも「この院、大殿にさしつぎたてまつり」（「若菜下」④一六〇頁）とあるように、源氏、頭中将の次に権勢を握る人物とされる。この例からも池田氏の述べるように、「いまめかし」という一語が権勢家を指し示す語として機能していると言えよう。

実際に当世風や派手などの意味で「いまめかし」が付与されている人物を見ていくと、朱雀帝の外戚である右大臣家、藤壺の兄である式部卿の宮、左大臣家の嫡子である頭中将、今上帝の第三皇子であり源氏家の婿となった匂宮、源氏の後継者である夕霧など内裏において絶大な権勢を誇る人々に「いまめかし」は付与されている。以上を踏まえると、「絵合」巻における頭中将の「いまめかし」さも、権勢家としての頭中将の在り方が示されていることが推察できる。

しかしながら、「いまめかし」の用例を注視していくと、単に権勢家に付与されているというよりも、「いまめかし」が付与されている人物が物語の時間の流れに伴って変化していること気づくことが出来る。「花宴」巻の右大臣家、「絵合」巻の頭中将、「若菜下」巻の式部卿の宮家、「宿木」巻の匂宮、「蜻蛉」巻の夕霧家という「いまめかし」の流れはその一族や家が権勢誇った時期と合致している。また、それぞれの「いまめかし」い人物や家が政治情勢の変化や死没などにより権勢を失うと、「いまめかし」が用いられなくなるという特徴がある。

「賢木」巻の式部卿の宮の例は、式部卿の宮が東宮である冷泉帝側の立場であることからこの例から反するように見えるが、同じく「賢木」巻で語られている左大臣家や冷泉帝方の人物たちが朱

雀帝側へ謀反と捉えられるような行動を行い[31]（「賢木」②一三九～一四三頁）、右大臣家に抵抗しているように見て取れる。この「いまめかし」も冷泉帝方である式部卿の宮が、あくまで「御あはひ」を「いまめかし」くすることで、右大臣方に対抗しているという自己演出であって、式部卿の宮本来の性質ではないことが分かる。故に、「いまめかし」は物語の権勢の系譜としての役割を果たしていると言えるのだ。

この系譜において重視すべきものはやはり、物語の前半における右大臣家と頭中将家という二つの藤原氏の姿である。二人の「いまめかし」の共通点として、もともと権勢家である二人が政治情勢によって勢い付いた時に付与されていることが挙げられ、右大臣は朱雀帝の即位によって勢い付く「花宴」巻で、頭中将は娘の弘徽殿女御が冷泉帝に入内し家が活気付いている「絵合」巻で付与されている。

坂本共展氏は、この右大臣と頭中将が『源氏物語』における藤原氏の氏の長者となる人物であることを指摘する[32]。右大臣の氏の長者の就任は、まさに「いまめかし」とされる「花宴」巻周辺のことであると考えられる。また、坂本氏は頭中将が氏の長者である時期を「藤裏葉」巻から「若菜上」巻であると述べるが、右大臣家まで吸収する形となった「絵合」巻の頭中将の在り方を踏まえると、この「絵合」巻時点で頭中将は既に氏の長者であると考えてよいだろう。とすると、右大臣家と頭中将は、まさに藤原氏の氏の長者となった時期に「いまめかし」とされているのである。それに加えて、これまで述べた通りその「いまめかし」は権勢家としての姿を示している。右大臣家と頭中将は「いまめかし」によって、勢い付く権勢家の在り方と藤原氏の氏の長者としての在り方が示されていることが分かる。藤原氏に付与される「いまめかし」は、付与された藤原氏が氏の長者としての役割を担いながら、それに加えて活気付き勢いづいている時に付与されるものなのだ。

頭中将の「いまめかし」について考えると「いまめかし」は、単に現代風であるとか目新しい事のみを示すのではないことが分かる。また「いまめかし」は、池田氏が述べていた「権勢家」を表す言葉として機能していることに加えて、藤原氏の気風を示しているといえよう。このことから頭中将が物語の藤原氏を負う存在、そして藤原氏の新しい氏の長者としての在り方を示唆していることが分かるのである。権勢を誇るということは、これまでにない政治・文化の担い手として注目を集めることであろう。藤原氏とはまさに皇統の外部にあって、政権交替を果たしながら、政治的文化的な新風を吹き込む存在であったのだ。

「絵合」巻では、対となる気風を持ち合わせた王氏と藤原氏の対立が「古めかし」と「いまめかし」に託されている。冷泉帝の寵愛が、王氏出身の斎宮女御に傾くことは、藤原氏にとって一大事であった。なぜなら、「いまめかし」く飾った娘が敗れることは、皇統に娘を入内させることによって、権勢を確立させて新しい文化の創造し、皇統に外部の血を送り込んできた藤原氏の伝統的な家の在り方が奪われることになるからである。しかし、『源氏物語』の藤原氏は、「絵合」巻から敗北し続けることになる。頭中将の敗北は、彼に託された藤原氏そのものの没落を招く。この結果、藤原氏らしさであった「いまめかし」い性質は、その系譜が示すように、式部卿の宮家や夕霧、匂宮などといった王氏や源氏に奪われていくのだ。これは藤原氏に、かつての「いまめかし」さが二度と戻ってこないことを明らかにすると同時に、これまで物語の藤原氏がなしてきた皇統に自らの家の血を吹き込むという役割が王氏や源氏に移行したことを読者に明示することになるのである。では、なぜ絵合に頭中将は敗れていくのであろうか。

四　頭中将と須磨の絵日記

冷泉帝御前の絵合でも頭中将は、「いまめかし」い絵を持って参上する。「いまめかし」が権勢家であるのに加え藤原氏の氏の長者を指し示し、藤原氏の氏の長者が従来ない新しい文化の創造者であったことを表していると考えると、「古めかし」い源氏方に頭中将は敗れるはずがない。しかし、物語は意外な結末を頭中将に与えるのである。

左はなほ数ひとつある果てに、須磨の巻出で来たるに、中納言の御心騒ぎにけり。あなたにも心して、果ての巻は心ことにすぐれたるを選りおきたまへるに、かかるいみじきものの上手の、心の限り思ひ澄まして静かに描きたまへるは、たとふべき方なし。……中略……誰も他ごと思ほさず、さまざまの御絵の興これにみな移りはてて、あはれにおもしろし。よろづみなおしゆづりて、左勝つになりぬ。

（絵合②三八七～三八八頁）

冷泉帝の御前での絵合は、混戦し夜となっていた。「いにしへ」の伝統ある絵も「いまめかし」い絵も両者共に趣き深く、数々の論争が行われた。とうとう最後の勝負となった時、源氏は「須磨の絵日記」を出し、人々がこれを絶賛したことで源氏方の勝利となる。

絵合を決したのは、源氏の「須磨の絵日記」であった。絵日記の登場によって勝敗が決したことを踏まえると、頭中将の「いまめかし」い現代的な物語絵はもちろんのこと、源氏の準備した「い

にしへ」より伝わる伝統的な絵の数々よりも、この絵日記が勝っていたことが言える。つまり、「須磨の絵日記」がそれらを超越するものであったと考えられる。勝利が十分可能であった頭中将が敗北したのは、「いにしへ」も「古めかし」も超越する「須磨の絵日記」が原因なのだ。では、頭中将を敗北に追い込んだ「須磨の絵日記」とはどのようなものであったのだろうか。また、何故頭中将はその絵日記によって敗れていくのであろうか。

そもそも「須磨の絵日記」は、源氏が京を離れたことによって手に入れたものであった。源氏の離京は、右大臣家にとって政治的に邪魔な人物を排除した動きである。一方朱雀帝にとってそれは結果として源氏を重用するようにと遺言を残した桐壺帝に反した行動となった。

つまり、源氏が「須磨の絵日記」を手に入れられたのは、朱雀帝が遺言に背いた結果の産物であり、そしてそれは言うなれば朱雀の御代が、桐壺帝の御代から引き継ぐべき正統性を持たぬ御代であったことを糾弾するものとして機能しているのだ。対して源氏は、「須磨の絵日記」を持つことによって桐壺帝の御代からの正統性を正しく引き継いだ立場を明らかにしていると言えるのである。

冷泉帝御前での絵合に際して源氏は、絵の中にこの絵日記を忍ばせている。その心境を本文は、「思すところありて」（「絵合」②三八三頁）と語る。桐壺帝によって次代の帝に据えられた冷泉帝の前で、再度自らの在り方をを明らかにしたかったわけである。一方の頭中将にとって、絵日記は「御心騒ぎにけり」と心を乱す存在であった。なぜなら、自らと強いつながりを持つ朱雀帝はその絵日記によって正統性を否定され、それに従っていた自らの立場も桐壺帝の遺言に背いた者であると源氏に明かされてしまったからである。また、その朱雀帝が正統性を失う原因である源氏の追放は、同じく「いまめかし」い藤原氏の右大臣家の外戚政治によってもたらされたものであった。朱雀帝の意思に沿う「宰相中将」であり、「いまめかし」と藤原氏を取りまとめる氏の長者の在り方を描き出される頭中将の「須磨の絵日記」への敗北は避けられないものなのだ。

源氏が絵の中に「須磨の絵日記」を入れたことは偶然ではなく、絵日記で朱雀帝や頭中将を叫弾することも視野にいれた判断であり、政治的な思惑によるものなのである。ゆえに、その心中は「思すところありて」と語られる。

源氏の策略に嵌った頭中将は、あと一歩で勝利を逃す。頭中将は朱雀帝の意思に従う臣下であったがゆえに、右大臣家のような没落を免れ、権中納言に昇進し権勢を掴む。勢いに乗った頭中将

は、藤原氏の代表者として「いまめかし」と語られる。娘を入内させることによって皇統に血と新しい文化を吹き込んできた藤原氏であったが、頭中将は藤原氏としての在り方故に、正統性を持たないことを明らかにされた時、源氏に勝利する希望を奪われるのである。

五　頭中将の目指したもの

頭中将の「須磨」巻や「絵合」巻の動きを見ると、頭中将個人としてというよりも藤原氏の一員として生きようとしていたことが見えてくる。では、頭中将はどのような特徴を持った藤原氏であったのだろうか。それを考えるために、頭中将と同じ権勢家が『源氏物語』においてどのような政策を行っていたか考えた。すると大きく分けて、入内政策と皇女降嫁という二種類の政策によって権勢家が栄華をつかもうとしていたことがわかる。

一つ目の政策である入内政策は、多くの家が行い物語において入内をした家は、右大臣家、鬚黒家、頭中将家、源氏家、式部卿宮家が挙げられる。これらの家は、入内の先にある外戚政治を目指してその政策を執り行った。しかし、娘が入内しただけでは、外戚政治をなすことはできない。入内した娘が、帝との間に皇子を生むことが必要なので生まれた皇子が帝として即位した際は、帝の母の後見である一族が政治を補佐することが外戚政治の形であった。帝の母の後見として、帝も後見していくことが外戚の務めであり、これによって政治を取り仕切ることができたのである。

政策の二つ目として皇女降嫁が挙げられる。皇女降嫁が行われた家として挙げられるのは、左大臣家、頭中将家、源氏家である。左大臣は正妻に桐壺帝の妹宮を迎えている。この皇女の降嫁によって、左大臣は義理の兄である桐壺帝に信任を得ており、桐壺帝と深く結び付くこととなる。[33] のちに左大臣は、家の跡取りとして源氏を婿に迎えることで桐壺帝との関係を強固なものとし、外戚である右大臣家すら圧倒していく。つまり、皇女の降嫁は王氏を家に直接取り込むことによって王氏との関わりを深め、権勢を獲得することができるのである。

このように『源氏物語』の政治者たちは、入内政策による外戚政治と皇女降嫁による王氏の取り込みによって王氏と血縁関係を結び権勢を獲得した。物語の頭中将家以外の藤原氏に限って考えると、右大臣家と鬚黒家は入内による外戚政治によって権勢を獲得しようとした。また、左大臣家は皇女降嫁による王氏の取り込みで権勢を獲得しようとしたのである。このようにそれぞれどちらかの政策を行い、権勢を獲得したのだ。これらに対して、頭中将家は両方の政策を推し進めている。入内政策による外戚政治と

皇女の降嫁による皇統の結びつきの両方を目指した家であるということが言えよう。つまり、頭中将家とは右大臣家的政策と左大臣家的政策を兼ね備えるという特徴を持った家であり、その政策面において父左大臣と義父右大臣の『源氏物語』における頭中将家以前の藤原氏を超えようとした藤原氏であったのである。

頭中将の政策は、王氏と相互に血縁関係を結ぶことに成し得るものであった。この王氏との相互の血縁関係を結ぶという政策は、史実でも行われた。時代を遡ると、嵯峨天皇の皇女（源潔姫）が藤原良房に降嫁したことよって、王氏と藤原氏の相互の婚姻関係が成立した。この結婚については以下のように説明されている。[34]

この、天皇家との間での相互縁組によって、冬嗣―良房という藤原北家の家系は、嵯峨皇統と緊密な関係をむすんだことにより、皇室を補佐する持権的な家柄を確定したのである。……中略……源潔姫の降嫁は、天皇家側が、人格・才能ともに卓越した人物である良房を評価したことによって成り立ったともいえる。

藤原良房は嵯峨天皇の皇女を妻に迎え入れることによって、権勢を獲得した。なぜなら、皇女がもたらされたことによって「藤原北家」と「嵯峨皇統」の間に緊密な連携が生まれたからである。良房も『源氏物語』の左大臣のように、皇女を家に取り込むことによって皇統との結びつきを強めたのである。またその中で良房は、嵯峨天皇の孫の文徳天皇へ娘を入内させている。この娘はのちに、皇子を生み皇太后となった。つまり、藤原冬嗣・良房親子は王氏と藤原氏の間で相互の婚姻関係を築き、良房はのちに王氏以外で初めての摂政となるなど栄華を極める。この栄華によって、冬嗣・良房の藤原北家は権勢を獲得し、子弟は次々と昇進するようになる。その後藤原北家は周知の通り、皇室を補佐する持権的な家柄である「藤原摂関家」を確立するのだった。

このように藤原冬嗣・良房の政策は、頭中将と一致している。また、冬嗣・良房が嵯峨皇統との結びつきを重視したように、『源氏物語』では頭中将家が朱雀皇統との繋がりを重視している。これまで述べてきた通り、頭中将は朱雀帝との関わりが深く親密であった。また、それは頭中将と朱雀帝個人の関係にとどまらず嫡子柏木と朱雀皇統の帝の今上帝との関係に引き継がれる。頭中将家は、かつての藤原冬嗣・良房が嵯峨皇統とそうであったように、朱雀帝だけではなく朱雀帝の皇統そのものと緊密に結びついているのである。

頭中将家が、朱雀皇統関わろうとすることも朱雀帝の出自を考えると妥当である。朱雀帝は、藤原氏である右大臣家を外戚に持っていた。

『源氏物語』において外戚は、血縁関係だけではなく幼少期の帝を養育するという役割を持っていたと考えられる。例えば、源氏から入内した明石の中宮は、当時の結婚制度に倣い第一皇子を六条院で出産している。また「横笛」巻では、明石の中宮出生の御子たちが六条院で夕霧と交流し、源氏たちに養育されている様子が推測される（「横笛」④三六二・三六三頁）。このように、入内した娘の生んだ皇子たちは、次代の帝を含めて外戚たちに養育されており、だからこそ外戚の家で養育された次代の帝は、馴染み深い外戚たちを自分の補佐として据えるのである。外戚は次代の帝を養育することによって帝の血を育み、のちに帝の政に寄り添うことを許されるのだ。

この帝を守り育てるという役割は、入内政策によって多くの帝の血と関わり補佐してきた藤原氏の使命であったと思われる。つまり、右大臣家を外戚に持つ朱雀帝は、藤原氏の血を持ち藤原氏に養育された帝であった。冷泉帝が源氏を筆頭に、母の一族である王氏を重んじるように、朱雀帝は藤原氏を重んじたのである。藤原氏である頭中将にとって、藤原氏を重んじる朱雀帝は、理想の帝であったのだろう。それゆえ朱雀皇統と強く関わり合おうとするのだ。

このように頭中将は、冬嗣・良房と同じように王氏と相互の婚姻関係によって皇統と強く結び付き、その血縁関係によって権勢を獲得しようとしていた。しかし、頭中将家と朱雀帝皇統は関わりを見ていくと、冬嗣・良房を超える頭中将家の独自の在り方が際立ってくる。

頭中将家と朱雀帝、朱雀皇統との関わり方は以下のように語られる。

御腰結には、太政大臣を、かねてより聞こえさせたまへりければ、ことごとしくおはする人にて、参りにくく思しけれど、院の御言を昔より背き申したまはねば、参りたまふ。

（「若菜上」④四二頁）

さる時の有職のかくものしたまへば、世の中惜しみあたらしがりて、御とぶらひに参りたまはぬ人なし。内裏よりも、院よりも、御とぶらひしばしば聞こえつつ、いみじく惜しみ思しめしたるにも、いとどしき親たちの御心のみまどふ。

（「若菜下」④二八四頁）

前者は頭中将と朱雀帝の関わりについて述べた箇所である。先に述べた通り、朱雀帝の言葉に頭中将は背いたことのない程朱雀帝の言葉に従い、言葉を大切にする臣下であった。そして、柏木も朱雀皇統との繋がりの深さが認められる。後者は、死へ向かう柏木を朱雀院と今上帝が、何度も見舞う場面である。帝との信望

が厚い柏木は、当代の優れた貴族の人物であったことが分かる。のちに今上帝は柏木がいよいよ臨終に近いと聴き、柏木を権大納言に昇進させる。[35] 柏木が権大納言となった喜びゆえに、参内できるようにと願ったのである。これらの場面から、頭中将家が血縁関係を結ぶ以上に、精神的に朱雀皇統と強く結びついているということが分かる。頭中将のこうした在り方は、血縁関係では頭中将家以上に深い関わりを持つ、右大臣家と朱雀帝との関係と大きく異なる。

御位を去らせたまふといふばかりにこそあれ、世の政をしづめさせたまへることも、わが御代の同じことにておはしまいつるを、帝はいと若うおはします、祖父大臣、いと急にさがなくおはして、その御ままになりなん世を、いかならむと、上達部、殿上人みな思ひ嘆く。（「賢木」②九七・九八頁）

桐壺院薨去後の場面で右大臣が実権を握ったことを述べている。「帝はいと若うおはします」とされているように、年が若いということから、政治の実権がその外戚である右大臣家に移っている。このように、右大臣家は血縁関係があることによって、帝から実権を取り上げ自身達が主体となって政治の実権を掌握するのであった。右大臣家と、頭中将家と比較すると帝への態度の違いが明らかなものとなる。頭中将家は血縁関係を結びつつも、帝の意思や言葉を重視している。それゆえに柏木の急病に際して、院と帝が何度も見舞うという出来事が起こるのである。

頭中将家の目指した家は、政策の面では王氏（嵯峨皇統）と相互の血縁関係を結ぶことによって権勢を獲得した、藤原冬嗣・良房に似ている。しかしながら、頭中将家は政策以上に朱雀皇統と精神的に強く結びつこうとした特徴をもっている。頭中将は精神的に深く帝と結び付くことによって、王者である帝に寄り添い、奉仕する、言わば理想の臣下（藤原氏）の家としての頭中将家の確立を目指したのである。権力を志向する貴族政治の中で、帝との精神的繋がりを重視する在り方は政治的なものではなかったかもしれない。しかし、頭中将はそれを選び、目指し追い求めたのである。つまり頭中将の目指した家とはまさに、始原的な理想の藤原氏であったと言えないだろうか。

しかし、頭中将は源氏に物語を通して敗北する。この結果として、源氏出身の中宮が何代にもわたって立后することになった。源氏からの中宮立后は、源氏の栄華を後押しし、藤原氏の没落を決定付ける。けれども、源氏出身の中宮が続くことによって、物語では弊害も生まれている。帝との間に皇子が生まれなくなっているのだ。第三部では、特にその問題が顕著であり、今上帝と明石の中宮の間に皇子はいるものの、東宮と将来の中宮の有力候補

である夕霧の娘大君の間には子がいない。また、蜻蛉の宮も夕霧の中の君と結婚しているが、子がいない。同じく皇子である匂宮と妻六の君も間に子がいないのも、天皇家の血に多く関与しすぎた源氏ゆえのことであろう。源氏は外戚政治によって栄華をつかむ。だが外戚政治によって得た権勢は、結果として物語に新しい子が生まれない遠因を作り、その血は物語の終末にことごとく絶やされていくのである。「いまめかし」という言葉が与えられ、皇統に新しい血と文化を送り込んできた藤原氏の排除は、皇統から新しい命の誕生をも奪うことになったのだ。

「須磨」巻において頭中将は、源氏を訪問する。従来この訪問は、源氏と頭中将の熱い友情を語るものとして語られてきた。しかしながら、この須磨訪問は朱雀帝の意思に沿おうとする頭中将の在り方を示している。頭中将は、朱雀帝の心情を思うからこそ、源氏がいる須磨を訪問するのだ。それはまさに、帝と精神的に結び付いた理想の藤原氏たる頭中将の姿であった。そうした意味において頭中将の志向は、生涯一貫しており、物語の進行によって変貌したとは言えないのである。

頭中将は源氏との別れ際、何度も何度も源氏の方を振り返りながらこう述べる。

（中将）「いつまた対面たまはらんとすらん。さりともかくてやは」（「須磨」②三一六頁）

きっといつかまた会えると、頭中将は源氏に言う。それに源氏は答えて和歌を詠むのであった。

（源氏）「雲ちかく飛びかふ鶴もそらにわれは春日のくもりなき身ぞ」（「須磨」②三一六頁）

源氏は自らの身の潔白と朱雀帝の臣下として正当であることを和歌を通して頭中将に訴える。宰相中将となった頭中将であれば、きっと兄にこの思いを伝えてくれるであろうと思ったのだ。

時は経ち、権中納言と内大臣になった二人は、絵合の場で対面することとなる。最後の絵順が来たとき源氏は、「須磨の絵日記」で改めて自分の正統性と潔白を明らかにし勝利する。一方で頭中将は朱雀帝の意思に従ったために、藤原氏として敗れ去る。須磨に至った頭中将は、そんな未来を予期してはいない。

注（1）『源氏物語』の引用は、小学館『新編日本古典文学全集　源氏物語』に依り、巻名、冊数、頁数を附す。以下同じ。

（2）『新編日本古典文学全集　松浦宮物語・無名草子』二〇〇頁。

（3）松尾聡「頭中将」山岸徳平、岡一男『源氏物語講座　第三巻　各巻と人物一』有精堂、一九七一年。

（4）武原弘「頭中将論―その人物の変貌と主題との関連性―」『梅光女学院紀要』一九七四年一一月。なお武原氏は、頭中将の人物像が物語の進行・場面の変更に伴って物語にその変貌を要請さ

れているとした。つまり、「絵合」巻以降、源氏がその政治者となっていくため脇役である頭中将は源氏に伴って政治者に変貌すると述べている。

(5) 北川原平造「頭中将の形成―光源氏の脇役(二)―」『上田女子短期大学紀要』一九八六年三月。

(6) 田坂憲二「頭中将の後半生―源氏物語の政治と人間―」『源氏物語の人物と構想』和泉書院、一九九三年、七五頁～九〇頁。

(7) 『新編日本古典文学全集　源氏物語』「行幸」③三〇五頁。ここには頭中将の兄弟が「藤大納言、春宮大夫など今は聞こゆる御子ども」と呼ばれている。また、『新編日本古典文学全集　源氏物語』「玉鬘」③一一二頁では、頭中将の娘である玉鬘も右近に「例の藤原の瑠璃君」と呼ばれている。

(8) 秋山虔、室伏信助編『源氏物語大辞典』角川学芸出版、二〇一二年、六二〇頁。

(9) 笹山晴生『日本古代衛府制度の研究』東京大学出版会、一九八五年、二七三頁。

(10) 『新編日本古典文学全集　源氏物語』「賢木」②一三九頁。ここに、「心とけたる御婿の中にも入れたまはず」とある。四の君と疎遠を頭中将が顧みないことが原因。

(11) 『源氏物語』の準拠とされている御代を参考に時代の設定を行った。

(12) 『新訂増補国史大系　公卿補任第一篇』吉川弘文館（一九九六年）及び、市川久編『近衛府補任　第一巻』続群書類従完成会（一九九二年）によって調査した。

対象となる人物は下記の通りである。藤原定国、藤原仲平、藤原定方、藤原恒佐、藤原兼輔、橘公頼、藤原賈頼、藤原師輔、藤原敦忠、源兼明、藤原師尹、源正明、藤原朝忠、藤原朝成、藤原伊尹、源延光、藤原爲光、藤原朝光、藤原義懐、藤原道兼、藤原道頼、藤原伊周、藤原道綱、藤原隆家、藤原斉信、源俊賢、源經房、藤原兼隆、源頼定。

(13) 藤原師輔（二十八歳・朱雀朝）、藤原師尹（二十七歳・朱雀朝～村上朝）、藤原爲光（二十九歳・円融朝）、藤原朝光（二十四歳・円融朝）、藤原義懐（二十九歳・花山朝）、藤原道兼（二十六歳・花山朝）、藤原道頼（二十五歳・一条朝）、藤原伊周（十八歳・一条朝）、藤原隆家（十七歳・一条朝）、藤原兼隆（二十四歳・一条朝）、源頼定（二十五歳・一条朝）

(14) 藤原仲平（左大臣）、藤原定方（右大臣）、藤原恒佐（右大臣）、藤原實頼（太政大臣）藤原師輔（右大臣）、藤原伊尹（太政大臣）、藤原爲光（太政大臣）、藤原道兼（関白）、藤原伊周（内大臣）。

(15) 藤原敦忠と藤原義懐の二名。

(16) 藤原伊周と藤原隆家の二名が九九六年に長徳の変でそれぞれ失脚している。

(17) 源正明　五十八歳。

(18) 藤原定方、藤原仲平、藤原恒佐、藤原実頼、藤原師輔、藤原師尹、藤原伊尹、藤原為光、藤原道兼。

(19) 藤原仲平、藤原実頼、藤原師尹。

(20) 藤原実頼、藤原伊尹、藤原為光。

(21) 女御として入内二十二例　藤原定国、藤原仲平、藤原定方、藤原恒佐、藤原賈頼、藤原師輔、藤原敦忠、藤原朝忠、藤原朝成、藤原伊尹、源延光、藤原爲光、藤原朝光、藤原義懐。藤原道兼、藤原道頼、藤原伊周、藤原道綱、藤原隆家、藤原斉信、藤原兼隆、源頼定。

(22) 立坊五例　藤原仲平、藤原伊尹、藤原爲光、藤原道兼、藤原道綱。
(23) 中宮皇后皇太后　九例　藤原仲平、藤原敦忠、藤原爲光、藤原朝光、藤原義懐、藤原道頼、藤原伊周、藤原道綱、藤原隆家。
(24) 秋山虔、室伏信助編『源氏物語大辞典』角川学芸出版、二〇一二年、六二〇頁。
(25) 源氏（十九歳・「紅葉賀」巻）、頭中将（三二～三五歳程度・「須磨」巻）、夕霧（一六歳・「藤袴」巻）、薫（十九歳「匂宮」巻）、蔵人少将（二七～二八歳・「竹河」巻）。年齢については、鈴木日出男『源氏物語ハンドブック』三省堂、二〇一三年および阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男『新編日本古典文学全集源氏物語①～⑥』小学館、一九九四年を参考にした。
(26) 夕霧―姉・秋好中宮（冷泉帝）、薫―姉・明石中宮（今上帝）、蔵人少将―姉・大君（東宮）。
(27) 右大臣家のことを「世を御心のほかにまつりごちなしたまふ人」と述べている（「須磨」②一九八頁）。
(28) 森野正弘「頭中将と和琴／光源氏と琴の琴」『中古文学』五五、一九九五年五月。
(29) 助川幸逸郎「〈今めかし〉という方法―光源氏世界の栄華と衰頽をめぐって」『国文学研究』一一三、一九九四年六月。
(30) 池田節子「「いまめかし」考―玉鬘十帖の光源氏―」『物語〈女と男〉新物語研究三』有精堂、一九九五年一一月。
(31) 後藤祥子「叛逆の系譜―「桐壺」の観相をめぐって―」『源氏物語の史的空間』東京大学出版会、一九八六年。
(32) 坂本共展『源氏物語構成論』笠間書院、一九九五年、二一三・二一四頁。
(33) 「この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏のひとつ后腹になむおはしければ」とある（「桐壺」①四八頁）。
(34) 鈴木一雄監修、中田武司編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識　若菜上（前半）』至文堂、二〇〇〇年一二月、九八・九九頁。
(35) 「おほやけも惜しみ口惜しがらせたまふ。かく、限りと聞こしめして、にはかに権大納言になさせたまへり。」とある（「柏木」④三一二頁）。

（二〇一六年度卒業）